

シリーズ

秘蔵写真

今は昔の林業

第43回

中部森林管理局総務課

井上 日呂登

今は昔、山村に暮らす人々とその生業としての林業を当局秘蔵の写真とともにご紹介いたします。

「裏木曾」その七

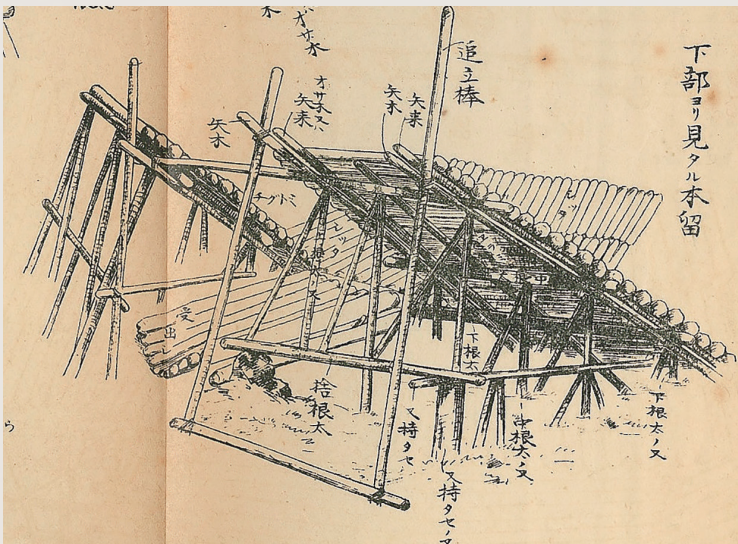
集材(ほさぬき)・留(まや)

木の伐採・造材・検尺が終わりますと、貴重な大材以外は斜面を利用して滑り落として運んでいきます。滑り落とすルートに木を集めることを「集材」「寄せ木」あるいは裏木曾では「ほさぬき」と呼びます。



大正時代初め頃の「ほさぬき」のイメージ
(「付知川に於ける材木伐出の沿革と絵解」より)

集めた木を山の斜面で集積・整理する場所として「留」(裏木曾では「まや」とも)が設けられました。これは運材ルート上の始点や区間ごとに設けられるもので、鉄道ならば駅に相当するものと言えます。



「留」(まや)の構造図
(大正5年帝室林野管理局発行「木曾御料林之造材運材」より)

傾斜地で木を集積するために、丈夫な木が藤蔓で堅く結ばれたしっかりとした構造だった。

たようです。上から滑り落とされてきた木が飛び出さないように斜面に対して二十度から三十度の角度で逆勾配がつけられました。また、「まや」(留)から「まや」へと木を動かすことになるので、山の斜面での運材を「まやはかり」と呼ぶこともあったとのこと。

(上写真) 明治末頃、木曾での留(まや)の様子



(下図) 大正時代初め頃の裏木曾での「まや」
「付知川に於ける材木伐出の沿革と絵解」より

ここで紹介している写真は、当局サイト「モノクロ森林紀行」で紹介しております。これは、カラー写真のない時代へ時を超えて！むかししの写真を紹介するサイトです。
当サイトへは、コードを読み込んでください。

